



# 平安座 (ヒヤンザ)

## 平安座の今昔

平安座は、与勝半島より東に浜比嘉島・平安座島・宮城島・伊計島と金武湾洋上に浮かぶ島である。「おもろさうし」には、「ひやもぎ」あるいは「ひやむさ」とあらわれている。島の歴史をみると平安座西グスクや与佐次川などの史跡・文化財などがある。

平安座はかつて漁業や海運業が盛んで、昭和の初期ごろには百隻余の山原船を所有。これらの舟は、平安座舟と呼ばれ、北は国頭から奄美諸島、南は宮古・八重山方面との交易で活躍したことで知られている。戦後の一時期には捕鯨業も行われていて、そのクジラが引き上げられたところに「クジラ浜」の地名もあった。

島の人々は、総じて青雲の志高く県内外において財界、教育界、政界など各界に多くの人材を輩出している。

昭和47年に平安座海中道路が開通するまでは、本島との往来は船を利用したり、干潮時を見計らって徒歩で往来したり、海上トラックと呼ばれる改造

したトラックで屋慶名と島を往復していた。明治14年、上杉県令が平安座に視察に来た時「潮退キ僅カ二人蹀ヲ没ス、舟ヲ用イズ籃輿ニテユク」(『上杉県令沖繩県巡回日誌』)にあるように輿に乗って渡っている。

※ルビは筆者

現在は、海中道路約5kmの中ほどに海の駅あやはし館もでき、周辺の観光スポットになり、屋慶名と平安座を結ぶという意味で「屋平」という地名が誕生した。

島の北東側には、石油備蓄用のタンクが建ち並び、隣接する宮城島や向かいの浜比嘉島とも橋で結ばれ、平成24年には近隣4島の小中学校が統合され「彩橋小中学校」が誕生した。

## 平安座の地名を考える

平安座の地名については、次のような説がある。

### 一、平家南走説

地元には伝わる説として、壇ノ浦の戦いで源氏に敗れた平家一族が南走し、その一部が平安座に逃れ島に住み着いたので「平家の安座するところ」という意味で「平安座」という地名になった。

### 二、南地(フェーチ)説

『沖繩地名考』(宮城真治)は「与那

城村の平安座島は、南地の義で、東五島中の主島たる高離から名づけられたのであろうか」とし高離は宮城島のこととで平安座はこの南に位置するから南地(フェーチ)からヘンザになったとしている。

### 三、干潟説

地元平安座出身の地名研究家奥田良寛春氏は「古くは、干潟を渡って行けばたどりつくという印象でヘンザ島と名称されたに違いない」。『干潟のことを八重山古語では、ペンといい、平安座でも干潟の蟹をハンザイ蟹と書いた。同語系で普通名詞を使って当字をした結果が平安座(ヘンザ)地名に定着したものと考えられる。』「要するにヘンジャは、干瀬のヘンと石のジャの合成地名ということであろう」と説いている。『地名を歩く』(南島地名研究センター・ボーダーインク)。

この説は、地元出身だけに平安座の地理的環境を的確にとらえた説と考えられる。他に平安座の集落が現在地の後方丘陵地の傾斜地にあつたことから平安名と語源を同じくする「傾斜地説」もある。

## ナンザ岩

平安座島東方約500mのところになんざ岩(ナンザ島)と呼ばれる面積0・001kmにも満たない小さな無人島がある。旧暦3月3日のサングワチャーには、ナンザ拝みと称して島の代表者が仮装してこの島に渡り豊漁・航海安全を祈願する。

ナンザ(ナンジャ)は、方言で銀・白銀をいう。平安座ではお産の時の旧慣に「ナンザマス(白銀の真塩)を供えて祝う儀式があつた(『与那城村史』)。このことからナンザの地名がついたのか、あるいは太平洋の荒波はまづこの岩に打ち砕けてから平安座島に寄せてくる。その打ち寄せる荒波の音「鳴る・ナル」がナンと転訛し、そして石のジャクがジャとなつて「ナンジャ・ナンザ」という音響地名になつたとも考えられる。さらに「ザ」は万座・宜野座などのように場所をさす語のことか、いろいろ考えられる。

なお、音響地名としては「轟の滝」や「ガンガラゲムイ」・「ジャーンジャーニングガ」など多くの例がある。

平安座島には、小字地名として「歌泰原」というカラオケファンの喜びそうな珍しい地名もある。